

今  
週  
の  
み  
こ  
と  
ば

「心の中でキリストを主とあがめなさい」

(列王記第一 19 章 1 節～ 21 節)

「しかし、わたしはイスラエルの中に七千人を残している。これらの者はみな、バアルに膝をかがめず、バアルに口づけしなかった者たちである。」

(19:8)

(ペテロの手紙第一 3 章 13 節～ 22 節)

「むしろ、心の中でキリストを主とし、聖なる方としなさい。あなたがたのうちにある希望について説明を求める人には、だれにでも、いつでも弁明できる用意をしていなさい。」(3:15)

### 今日 の メ ッ セ ー ジ 要 旨

◎私達が人生を歩む時、人々から受け入れられる時もあれば、受け入れられず、誤解され、窮地に陥ることがあります。そのような場合にどうすれば良いのか？

◎列王記第一19章には、バアルの預言者と命がけで戦ったエリヤは、心身共に疲労の極にあった。アハブの王妃イゼベルの脅かしに対しても抗う力がなく、震え上がって逃げ出したのです(1-3)。誰にでもこのように逃げなくてはならないという時があるものです。主は私たちのそういう弱さと必要も知っておられるのです。神様はエリヤに食物と水を用意し、一息つかせてくださったのです(5-7)。睡眠、食事、声をかけてくれる人、静かなところ、疲れて心も視野も狭くなった時、そんな休息が必要となるのです。主のご配慮でエリヤは元気を回復し、「神の山ホレブ」(シナイ山)まで40日の旅は出来たのです(8)。エリヤは自分が如何に孤独かを訴えたのです(10)。主は食べ物と休息を与え、彼の心の視野を広げられた。これからの展望、後継者エリシャのこと、主に忠実な7千人のことを知らされ(15-18)、エリヤは元気になり、勤めに戻れたのでした。

◎ペテロはローマで過ごしている時、ネロ皇帝による迫害によってAD65年に殉教しました。ペテロは63年頃に第一の手紙を書きました。迫害が始まったのが64年頃と言われていますから、手紙の内容は「苦難の中にあるキリスト者」を励ますために「キリストの苦難」が強調されています。キリスト者が受ける「苦難」とは、異境社会で忠実に生きようとする時に会う「敵意に基づく」ものであったと察せられます。 ◎ペテロの手紙第一 3 章は 2 つに区分されます。① 1～7 節、キリストの足跡に従う信仰者の家庭生活、② 8～22 節、義のために苦しむとき、です。今日は② 8～22 節の箇所ですが、そのうち特に 13～22 節が主題です。

ペテロは「善を行っていて」(2:20)、「義のために」受ける苦しみのある現実を明らかにしております。それは「幸いなこと」なのです(14, マタイ 5:11)。それは「キリストの苦しみ」にあずかれるからであり、「キリストの栄光が現れるときに喜びおどる者となる」からであり(4:13)、また「栄光の御霊、すなわち神の御霊が、あなたがたの上にとどまってくくださる」からなのです(4:14)。「苦難のある」現実を「恐れたり、心を動揺させたりしない」で、ペテロは「キリストを主と崇めよ」と勧めたのです。そしてもし「あなたがたのうちにある希望」について「説明を求める人がある」場合には、「優しく、慎み恐れて、正しい良心を持って弁明しなさい」と勧めているのです。 ◎「正しい方であるキリストが、悪い人々の身代わりとなって罪のために死なれたのは、私たちを神の御許に導いて下さるためであり、キリストは復活され、神の右の座におられる」のです。その御方は捕われの霊たちの所にくだって下さったのです。真の方舟であられ、水のバプテスマによる救いに与り、復活されたキリストを仰ぎ、主の勝利に与りたいものです。